

1. 研究の目的

自然—環境教育がさまざまな場面で実施されてきているが、適正な自然利用の促進、保全的自然認識の形成のためには効果的な教育内容や教育方法を検討する必要がある。本研究では、自然教育を目的とした厚岸水鳥観察館の展示・行事の方法や内容を、利用者の評価から検討し、道東の2博物館との比較を行なう。また、厚岸町民の意識調査から、地元住民の自然教育への参与の現状と教育内容に対する潜在的な要望を明らかにする。そしてこれらから、自然教育展示の意義と必要とされる方法・内容について考察する。

2. 調査方法と分析方法

調査は基本的に自記式質問紙を用い、機関を通じた配付・回収と設置式による配付・回収を中心に行なった。観察館来館者については1998年7月から10月までの間にバスツアー参加者を中心とした303件の回答を得た。町民については1999年3月に小中学校を通して回答を依頼し回収した。

3. 調査結果

(1) 来館者の構成と利用形態

対象者は道外が74%で、初めて利用する人がほとんどだった。利用時間はバスツアーの20分がほとんどで、それ以下で91%を占めた。

(2) 最示の表示方法と内容に対する評価

展示の表示については、全般に肯定的な評価であったが、読む展示の少なさや観察器具の扱いにくさに批判が多かった。内容では「知らない知識を得る」56%「野鳥を実際に見る」54%「美しい写真や映像を見る」50%「この地域の自然について学ぶ」50%といった点で満足感を得ている人が多かった。特に設置カメラの映像を用いた観察館職員による解説に対する評価が高く「現在のタンチョウや水鳥の状態が映像で見れる」「職員の方の説明、素人ではわからない所にいる鳥」といった声が多くあった。

(3) 展示・行事に対する要望

今後欲しい展示の内容としては「野鳥の不思議な生態の話」34%「この周辺の自然の紹介」27%「本物を体感できるような映像」25%「自然への接し方の紹介」24%といったことが挙げられた。開心ある行事としては「湿原講座」40%「野鳥の調査」24%が多く挙げられ、野外での観察会については「有料でも参加したい」という人が50%、「無料なら」を合わせると90%となった。

(4) 湿原の保護とカヌー利用に対する認識と意向

「現在の湿原は全て保護すべき」という人が99%を占め、保護のためにカヌー入り込み数を規制することも97%の人が支持した。

4. 考察

観察館の常設展示は規模も小さく、他の博物館に比べて体系的な教育内容としては不十分である。しかし、カメラを用いたリアルタイムで見られる野鳥の紹介は評価が高く満足感を与えている。野鳥の生態や湿原保護への意識の喚起にも有効である。今後の教育内容としては、野外での観察会や調査などの体験型や、自然との接し方や環境問題などの自然と人間との関係のあり方に踏み込んだものが、利用者の要望が高く効果が期待できる。